

サトリの
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗圓受院住職
田島辨正さん

第90回

高校時代は放送研究会に所属。大学では誘われるままに男声合唱団に入り、否応なく声を鍛えられてきました。合唱団の定期演奏会では必ず「仏教讃歌」を歌いました。仏教讃歌は仏様をお讃えする歌です。歌詞の意味を学びながら仏様の教えに触れていく中で、自分自身が実践してみないと理解できないと思い、お坊さんを目指して修行することに。すでに大学で文学部を卒業していましたが、改めて仏教学部に編入し、夜は大学に通い、昼は池上本門寺で修行してお坊さんになりました。

高校・大学と声を鍛えていたこともあり、お坊さんになってからはお経に節をつけて唱える「声明」の道へ進みました。

馴染みやすい仏教讃歌で 仏教を身近に感じてほしい

そもそも宗教と音楽には密接な関わりがあります。古来から宗教は音楽を通じて神や仏に心を通わせ合うものでした。世界中のどんな宗教でも、その中心には必ず音楽があります。仏教ではお経そのものが音楽なのです。

戦前までの人々は、古来から伝わるさまざまな日本の音楽に慣れ親しんでいました。お経を聞いてもそれが音楽に聞こえるわけですから一緒に唱えることに何の違和感もなく溶け込みました。しかし、戦後はロックやフォークソングなどさまざまな西洋音楽に囲まれるようになりました。日本古来の音楽は耳にする機会が減り、異質なものに。生活に密着していたお経も、だんだんと日常から切り離されるようになってしまいました。

私はみなさんに仏教をもっと身近に感じていただきたいと思っていました。そのためにも、お経よりも馴染みやすい音楽、仏教讃歌を広めていきたいと思って活動しています。仏教讃歌はピアノやオル



上／3年に1度開かれる「日蓮宗仏教讃歌発表大会」(写真は2015年)。全国仏教讃歌協議協会会長の田島さんは事務局長時代に司会も務めた。下／埼玉県深谷市にある日蓮宗圓受院。

命への感謝を忘れないため にも仏様に手を合わせて

では仏様とは何か？ 本来お経では、仏という存在の中に私たちがいる、また私たちの中に仏という存在がいると説かれています。仏様は遠いところにいるのではなく、私たちがいるところ、私たちが命そのものなのです。

網の目のような縁を繋いで命がリレーされ、私たちはこの世に生まれてきました。さまざまな命に支えられて自分がここに生かされているのだという感謝を忘れてはいけません。命への感謝を日々の生活の中で実感するのはむずかしいでしょう。その思いを自覚するための行為が仏様に手を合わせることに。そして感謝の言葉を述べるのがお経や仏教讃歌です。仏様を讃えながら、すべての命を讃えていきましょう。

さまざまに命に支えられて
今生かされていることに感謝を



たじま・べんしょう 1951年生まれ、大阪府出身。立正大学文学部、同大学仏教学部卒業。1980年より埼玉県深谷市の圓受院勤務、1998年より住職。日蓮宗布教専修師、日蓮宗声明師。日蓮宗布教研修所主任、日蓮宗信行道場副主任などを歴任。現在は日蓮宗宗立学寮声明研修講師、立正大学仏教学部「法要実習」講師、日蓮宗全国仏教讃歌協議協会会長を務める。